

シダ植物の仲間

久徴園入口や東屋周辺のスギ、サワラの林床はシダ植物にとって湿潤で良い環境が保たれており、様々なシダ植物を見ることができます。ここにある全てのシダ植物を紹介することはできませんが、県内でも見られるシダを中心に紹介しています。自然を形成する上で欠かせないシダ植物。ぜひこの機会に目を向けてみてください。

イノデ （オシダ科）

イノデの名は、葉柄に毛のように見える鱗片^aが密生しているので春先の葉の展開が猪の手のように見えることに由来しています。本州以南に分布し、県内でも隠岐を含めて広く分布しています。イノデの仲間は種類が多く県内にも多くの種が見られますが、その中で低地の乾燥した場所に生え、細い鱗片が密生して毛むくじらのように見えればこのイノデになります。園内には他にサカゲイノデ、アアスカイノデ等があります。



イノデ

.....
a 鱗片 / 生えている毛が魚類や爬虫類のように広がり鱗状になったもの。

ベニシダ （オシダ科）

春の葉が開く時に全体が明るい赤色に染まることに名前が由来します。本州以南のやや乾いた林床下に普通に見られるシダで、県内でも隠岐を含め広くみられます。ベニシダ類はかなり種類も多く分類も難しいのですが、常緑で下側の葉の切れ込み（小羽片）があまり伸びないことです。これが伸びているとイタチシダ類となります。また葉の先端がやや急に幅が短くなって伸びていることも特徴です。久徴園の谷部にはベニシダ類としてベニシダやトウゴクシダ、ハチジョウベニシダ、イタチシダ類としてオオイタチシダ、ヤマイタチシダ、ヒメイタチシダなどがあります。小さい立て札も立っていますので見比べてその違いを感じてください。



ベニシダ

クリハラン（ウラボシ科）

葉がクリ（栗）の葉に似ていることから名づけられました。本州の関東以西に分布し、県内でも隠岐を含めた谷部の陰湿な場所に見られ、根茎を伸ばして群生します。ウラボシ科は葉が切れ込まないもの（全縁の単葉といいます。）が多いグループでその典型的な形をしています。久徴園ではメタセコイアの下に植えられたものが繁殖し、密生して周囲を取り囲んでいます。荒神谷や立久恵峡などでも見ることができます。



クリハラン

コラム

～シダ植物とは～

ワラビやウラボシ、ゼンマイ、イヌガンソクなどをシダ植物という。シダ植物は、コケ植物のように胞子で繁殖し、茎に維管束^aがあるので、コケ植物と維管束の発達した種子植物の中間に位置する植物群である。シダ植物は約4億年前の古生代シルル紀にツノゴケ類と同じ起源のものから進化したとされる。古生代石灰紀には、巨木に発達し茎の直径80cm、高さ30mものリンボクやフウインボクそれにロボクといった木生シダが大森林をつくった。木生シダの巨木は、石灰紀、デボン紀以降には倒木となって土中に埋没し、長い年月のうちに地熱と圧力で炭化し、良質の石炭・無煙炭になった。更に長い年月を経て、シダ植物は小型化し、現在では草丈2m以下と小さくなった。そんな中で、沖縄から南の熱帯地方では、高さ6～8mのヒカゲヘゴなどの木生シダが今でも繁茂している。

.....
a 維管束 / 植物体内で、水分や養分の運搬、支持の役割をする管状の束。



リンボク



ヒカゲヘゴ（沖縄）



イヌガンソク（現在のシダ植物）

オオバノイノモトソウ（イノモトソウ科）

イノモトソウ（井の許草）というシダは井戸の周りに生えることに由来していますが、これより大きな葉をもつことからオオバノイノモトソウと名づけられました。どちらも本州北部から南に広く分布しており、県内でもどちらも広く分布しています。生えている場所は若干異なり、イノモトソウは岩や石垣に、オオバノイノモトソウは乾燥した林床に見られます。これら2種は大きさも違いますが、葉軸の部分に翼があるかないかの違いもあり、あるのがイノモトソウ、ないのがオオバノイノモトソウです。園内にはどちらも見られますが、やはり好きな場所は違います。



オオバノイノモトソウ

リョウメンシダ（オシダ科）

名前どおり葉の表と裏が同じように見えるシダで、葉が常緑で細かな切れ込みがあるのが特徴です。オシダ科という広いグループの中で金属のような硬く光沢のある葉をもつカナワラビの仲間です。この仲間はホソバカナワラビ、コバノカナワラビ、オニカナワラビなどが久徴園にも生育していますが、リョウメンシダだけは葉が柔らかく、同じ仲間とは思えませんが、近い種類なので稀に雑種をつくることがあります。日本全土に広く分布し、県下でも杉の植林下など、やや湿った林床に群生しています。



リョウメンシダ

ヤブソテツ（オシダ科）

藪に生えるソテツのような葉をもつヤブソテツ類の代表です。これまでヤマヤブソテツというシダもありました。羽片^aが10～15対と少なく、幅が3cm以上と幅広く、胞子を入れる胞子のうの上にある包膜が白いなどの特徴のものをヤマヤブソテツとし、この特徴をもたないものをヤブソテツと分けていました。しかし、ヤブソテツの基準標本がヤマヤブソテツに近いものである等で現在はすべてヤブソテツということになっています。北海道では極稀で、本州北部から南に広く分布しています。県内でもいずれの特徴をもつものも見られます。また、園内には、新たに分類された、葉に光沢のあるテリハヤブソテツもあります。



ヤブソテツ

.....
a 羽片 / 葉が切れ込んでできたそれぞれのまとまり、その一片。

ノコギリシダ（メシダ科）

葉の縁に鋸のようなギザギザの鋸歯があることから名づけられました。東北南部から南に広く分布し、県下でも丘陵地の林床に群生しています。久徴園では東屋下の斜面に群生しています。メシダ科はイヌワラビ類など柔らかく夏緑性^aのものが多い中で葉も硬く常緑性となっています。シダの仲間は、どれも同じように見えて区別が難しいのですが、沢山のシダを見ているうちに違いが分かってきます。

.....
a 夏緑性/ 冬は枯れて、夏だけ葉をつける性質。



ノコギリシダ

イワガネソウ（ホウライシダ科）/ イワガネゼンマイ（ホウライシダ科）

岩の間に根を伸ばすように生えるということから「岩カ根草」といい、北海道南部から南に広く分布しています。またこれに似たイワガネゼンマイは葉がゼンマイのようだというので名づけられ、これも北海道から南に広く分布しています。これらは県内でも隠岐を含めやや湿った林床に群生しています。この二つはよく似ているのですが、葉の裏をみてください。イワガネソウは葉脈が網目状になるのに対し、イワガネゼンマイは中心から出る葉脈が分かれ、再び結合しないので網目状にはなりません。他にも、イワガネソウは羽片の先端がしだいに細くなることや光沢がある点で区別することもできます。園内にはどちらもあるので葉をめくって確かめてください。



イワガネソウ

オシダ（オシダ科）

オシダ（雄羊歯）科を代表する種で植物体が大きく勇壮であることに由来します。北海道から四国までのブナ林などの冷温帯の林床に広く分布しています。県内でも中国山地や三瓶山塊などの700 m以上に分布していますが、島根半島では500 m程度の山頂付近で少数が確認されており、隠岐では海拔50 m程度の低標高でも見られるなど、県内で分布帯の変化が分かります。園内には2株ありますが、谷部で生息地に近い環境なのかその雄大さも実感できる大きさに育っています。



オシダ

随想

『かけがえのないもの』・・・久徴園ころ旅

22 期卒業生 田中 和彦

『遠い日の Nostalgia』・・・「生物部」「サンショウウオ班」

思えば私の高校生活は「久徴園の青春」だった。「生物部サンショウウオ班」に所属したが、格別に植物や生き物に関心があったわけでもない。野歩きやキャンプが楽しそうだった。専門的な素養は身に付かなかったが、「久徴園」「植物園」が多少なりとも身近な存在ではあった。加えて、当時はクラス仲間ですること久徴園にいた。ほどよい息抜きの場所であり、終業式やら何か節目の時には頂上広場で記念写真を撮ったりしていたものである。

『止まっていた時計が動き出した』－久徴園にはじまり、久徴園にかえる。

昨年につづいて、久徴園ボランティアに参加した。(2018 年・2019 年)一年に一度でもいいから、百年の森に再会する機会があることは嬉しい。今回は、新たに同級生を誘ってみた。まるで久徴園で同窓会を開くみたいで、還暦をすぎて久徴園に還ってきた感覚になった。

『君に逢いたくなったら』－ SNS での久徴園とのふれあい

出雲高校のホームページを見てみると、PTA 研修での「久徴園散策」やグループでの「視察散策」の記事が目についた。月々の「久徴園の草花」も写真・コメントつきで紹介されている。そもそも学校HPにこうしたコーナーがあること自体が秀逸である。立派なことであり、有り難く、嬉しくそして誇らしく思う。SNS 時代にも久徴精神健在である。

『きっと忘れない』・・・植物園が見てきた「戦争」「人間社会」「気候変動」

私は今、故人(ZARD)の歌を日々聴いて元気をもらっている。我ながら不思議な気分である。私達はふつう、「今」を「生きている」ことを前提に何かを感じたり、物事を論じたりする。しかし、「先に逝くもの、残されるもの、残されるものもまたやがて逝くもの」である。(谷村新司「流星」)

「昭和 16 年大東亜戦争勃発前後より食糧増産が作業科の目標となり、植物園も逐次畑に転換され、鑑賞植物園もカボチャ畑となった。」(「平田植物園」園史より)・・・今では想像も出来ないことだが、こうした歴史の上に今があることを忘れてはならない。

『あなたと共に生きてゆく』・・・「平田先生」「柳楽先生」そして数々の先人

戦争によって荒廃した植物園を「復興」させた人々がいる。一口で「学校植物園の整備」というレベルではない尋常ならざる「思い入れ」となみなみならぬ脈々とした「努力・実践」の歴史である。各界の方々が尽力されている。お名前を挙げれば紙面がなくなるが、時の知事や学校長、先生方、園丁さん、PTA、地域の方々、・・・平田駒太郎先生、柳楽茂先生・・・死してなお生命力あり。今も大きな意志が生き続けている。

先人の声を聞くことで、未来が見えてくる。「温故知新」がエネルギーである。

『マイフレンド』・・・現実社会と大地と自然が教えてくれる

40代～50代、行政とのかかわりの中で、やはり自然と人間の関わりは大きなテーマであった。災害対策をはじめ、「浜遊自然館」「夢の森うさぎ」「日御碕マリンミュージアム」等々すべて自然との向き合いであった。そして60代の今、冬に育つ野菜の不思議やたくましさや健気さに感心しながら畑仕事をしている。夏から秋にかけて咲きほころ「ヒオウギ」の黒い種や「フウセンカズラ」のかわいらしいハート形の種を蒔く、そのくりかえし。齢をかさねながら、あらためて自然に還り、久徴園の青春が蘇ってくる日々である。

『翼広げて』『負けないで』・・・壮大な営為としてのバトンリレー

「聖地」だという方もいるが、少なくとも「山高」のシンボルであり、有形無形の自然的文化財産である久徴園・平田植物園。多くの人にとっての記憶遺産でもある。―「誰だってあるんだろう／心の奥に／宝物の地図／大切な場所へ」（「こころたび」池田綾子詞）―このかけがえのないものを次代にぜひ引き継いでほしいものだ。そのためには、ひとびとの共感と理解のもとでの持続的な営為が必要である。手つかずの自然という言い方もあるが、ほどよい人と自然とのかかわりが欠かせない。熱い心と手間も必要だ。格好の良い言葉だけでは成り立たない。そこに、たくさんの方々がかわること。ひととひとをつなぐこと。氣にかけつづけること。そうして歴史が重ねられていく。

（注）小見出しは、なぜか、すべて ZARD アルバムより援用しました。

百年の森カコミライ・・・『恋する植物園』（2020年～2120年）

「・・・小山の上にありて、今市を俯瞰し、簸川平野を見下して、形勝すぐれたるが、平田園出来て、雲州は新たに一の名所を生じける也。」（大正11年発行大町桂月全集より）

昭和51年「久徴園管理委員会」がスタートした際の『平田植物園』誌面には誕生からの72年間の歴史区分が記載されている。(1) 明治37年に始まる創設発展期 (2) 昭和16年からの戦禍にともなう衰退期 (3) 戦後の復興整備期。そして、(4) 発展期として「島根県植物研究センター」構想などが掲げている。そこから44年程が経過し、「平田植物園」「久徴園」はすでに一足早く「百年の森」となり、新たな「百年」がはじまっている。今、我らはここにいる。「発展」であれ「停滞」であれ「成熟」であれ、「百年の森」はそこにある。大事なことは、ひと・もの・ことのかかわりであり、ものがたりであろうか。すでにはじまっている次なる百年は、究極の標題化をすれば・・・(5)『恋する久徴園』『恋する平田植物園』（2020－2120）

百年の森に寄り添い、育み合うこと。ひとりでも多くのひとが、参加・参与・関与すること。かわりあうこと。（※ちなみに、世界の歴史的灯台百選に選ばれ、同じく百歳を超えた日御碕灯台も海上保安庁によって「恋する灯台」と呼称されている。）肝心なことは、持続性であり、関心をもちつづけること。さらにひろげること。森に声をかければ、植物がささやき、久徴園がこだまする。・・・ひとと森が響き合い、そうして、かけがえのない「百年の森」はいっそうの共有財産となり、さらなる普遍的価値をもつこととなり、ひとが寄り添いあい、ひとをはぐくむ大きな森となる。「SDGS」（持続可能な開発目標）と言う言葉があり、世界的な取組みがなされている。何事も持続することは難しい。とりわけ植物園の存在は地球環境が保全されていることが大前提。気候変動に左右される世紀においては、さしずめ「平田植物園」は、地球環境保全センサーステーションの役割にもなるのだろうか。困ったときには、植物園が教えてくれる。なにより、身近に野花にふれるゆとりと度量のある社会であることであり、卒にはまらない創造的な学びの環境であることが求められる。平田植物園観察会や撮影会はもとより、久徴園で月をめぐる観月会や久徴園音楽祭・・・夢見ることが恋のはじまりである。「八雲立つ」が出雲の枕詞であるように、「久徴」を枕詞にした歌会でもはじめようか。